
幻想昔神紀

不知火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想昔神紀

【Nコード】

N7074W

【作者名】

不知火

【あらすじ】

ある世界で生活をしていた一人の男。

二人の姉と一人の妹を持つ剣術と異常な力を持つ男。

見た目はいたって普通の人間、力は神を凌駕する異端の子

ある日、ひよんな事で現代から1000年以上も昔の世界に送り飛ばされる

世は未だ妖怪が蔓延る時代

背中に漆黒の翼を携えた一人のしがない剣士の話である

第一話 古の日の本（前書き）

作者は文才がないのでかなり文がひどいです。

第一話 古の日の本

いにしえ
古の日の本

世は平安時代後期、怪奇現象が「妖怪」と呼ばれ始めた時代である

俺は『雨条 刃』（うじょう じん）

この世界とは別の世界に住む者だ

今、俺は小さな村で怪異の影響を断つなど、他人から依頼を受けそれを遂行する万屋をやっている

「最近あまり人からの依頼が来ないな」

万屋として依頼が来ないのは非常に死活問題である

まるで嵐の前の静けさである

「近々何かあるかね……」

あまり今の環境は変わってほしくないがいずれ変化は来る

「ここは一つ外に出て情報を集めに出ようか」

この時代で刀を腰に差しているのは武士だけらしいが俺は仕事柄必要のために普段から腰に剣を差している

着物を整え腰に身の丈ほどの長さの刀を差し扉を開ける

「それじゃ……行つてきます」

返事の返つてこない家の中へ一つ言葉を発し扉を閉じる

外は晴天、日は高く、くすみの一つもない青い空がある
すうつと息を吸つてゆつくりと息を吐く

周りを少しきよろきよろと見て何かがありそうな方向を感覚で決めてそつちへ歩き出す

擦れ違ふ人たちに軽く挨拶をしたり世間話をしたりとゆつたりと過
ごす

数時間、人に話を聞きながら歩くといつの間にか村の外に出ていた
だが、まだ日が高いので少し探検しようと思ひ森の方へ足を運んだ

この後、人生で最も厄介な事に巻き込まれるとも知らずに

第一話 古の日の本（後書き）

ということで第一話でした。

アドバイスを頂けるとありがたいです。

更新が不定の為次回の投稿1週間以内は約束できません

誤字・脱字の報告や感想お待ちしております

第二話 境界と矛盾（前書き）

これだけ時間を開けたのにこの始末

就職試験を終えて急ぎで書いたのでかなりひどいです

一応、推敲はしていますがそれでもひどいと思います

第二話 境界と矛盾

境界と矛盾

森に足を踏み入れて約一時間
ある意味、極限状態に陥っている
それはなぜかというところ

「完全に迷ったな」

来た道はわからずどこへ行けば出られるのかわからない
迷子という状況、精神力が徐々に削られていく

左へ行けば木々が生い茂り
右へ行けば草木が鬱蒼と茂り
どこへ向かっても同じ風景が続く

「むう……………」

一つ小さく唸る

普通の人間なら錯乱してかなり危険な状態だろう

俺はなぜ平然を保てるかというところ……

——矛盾と定義を弄る程度の能力

言葉で説明できない事と、物事の意味・内容を区別するよう限定
されている事を弄れる

元来、人間とは生を受けたら短い時間で老いていずれ死す

これは自然の摂理で尚且つこれは物事として限定されている「定義」である

つまり俺はこの「定義」を捻じ曲げて無理やり矛盾させたのである

人間は死ぬ、俺はその定義を破壊した

「まあ、死にはしないから大丈夫だが……」

死ぬことに対して心配しているわけではない

なぜ早く出たいかというと

「家の戸閉まりしてないんだよな」

まあ、要約すると空き巣が怖いわけで早く帰りたいわけである

「日も傾いて来ているしな、速くしないと」

少し駆け足で真っ直ぐ突き進んでみる事にした
外へ出ればきつと帰ることもできるだろう

出られないなんてことはあり得ないだろう

「森なんて迷いやすいだけで一方向に進めば出られるはずだ」

気合いを入れて走り出してみる

だが現実には甘くなかった

数分だが走り続けた

——— どれだけ広いんだよこの森……

未だ見えている風景は緑一色と言った具合
森の中である

「はあはあ……くそつたれ……気味が悪い森だ……」

誰かの能力でも働いているのかとか単に広いのか判らないがとりあ
えず出れない

かなり息も上がってきて疲れが出ている
空は黒く染まってきている星が見えて来ている

——— もう少ししたら本気で、襲われる、時間帯だな……

その前には何があっても家に帰りたい
妖怪に襲われて、ボロボロになるなんて真っ平御免だからな

「もしかしたらもう少しで出れるかも知れないしな、もう少し頑張
ってみるか」

頬を叩いて気合いを入れ再度、脚に力を込め一気に走りだす
暗く足場が見えない獣道を走り続けるのはかなり体力を消耗するら
しく三分もしないうちに足が止まる

「くそっ……本気で奇怪だと思い始めてきたぞ……はぁ……」

軽く吐息して辺りを見回す

一寸先は闇と言わんばかりに真っ暗であった

さすがに俺もこれだけ走れば疲れる
その場に腰を下ろし座る

「ああゝ腹減ったゝっ!!」

むしゃくしゃして叫んだ
なんせ昼から何も食べてないのだから当たり前である

探究心と好奇心だけで森に入った自分を呪ってしまいたいと思った

あまり外からの人が入らないこの森に一人の人間の気配が現れた
おそらくだが普通の人間である妖怪の多いこの森に一人で来た

「一体、何者かしらね……」

もし本当に普通の人間だったら笑い話にもほどがあるわ
ただの人間が妖怪相手にまともに戦えるわけがない

身体的に考えても能力的に考えても

何せこの世界では能力という潜在的なものがあるがそのほとんどは妖怪に覚醒する

人間に覚醒することはほんの僅かである

単純に自分が出会ってきた人間の中にはほとんどいなかったのだ

「どんな人間なのか少し興味が沸くわ」

スキマを開いて気配の元へ向かう

感覚から察するにあまり遠くはない

むしろこつちに近づいてきてるぐらいだ

奇襲という名の悪戯でも仕掛けてみよう

おそらく相手の背後に出るはずだここでスキマを開こう

「こんな場所に何用かしら？」

いきなり現れた気配、そして能力の臭い
おそらく、襲われた、

「こんな場所に何用かしら？」

「ただ迷っただけですよ」

背中から感じる相手の気配を探りながら少しずつ振り返る
声からして相手は女、それも中々に若いと思われる

「人間」がこんな場所に来たら大変じゃない」

「ええ、大変ですよ」

後ろから感じる気配は狩人の気配

間違いなく相手は妖怪である、背中を伝う冷や汗に気味の悪さを感じながら相手とやり取りを続ける

「それで、どうやってここから出るつもり？」

「そうですね……森　ここに仕掛けられている結界の発動者を倒して……とかですね」

やってしまったと内心、強く後悔した

一気に空気が張り詰めて周りの木々もざわめき始めている

感じる気配も完全に殺意の気である

さらに莫大な妖力までも感じる

——これは悪い籤を当ててしまったな……

相手は間違いなく『大妖怪』である

「面白いわ、ならそれだけの事を言うだけの力を見せてもらっわ」

「ちっ……厄介な事をしてしまったな……」

腰の刀に手を当て一気に振り返る

振った先は妖怪の首筋

振りかえりと同時に振られたその銀の刀身は完全にこちらの首を捉えていた
普通の人間、いや並の妖怪なら反応できずに斬り落とされていただろう

そう、並の妖怪なら

ギンツと鉄がぶつかる音を上げそれ以上動かない腕により一層力を込め振り切ろうとする少年

「やっぱり一筋縄では行かないか」

「普通の妖怪なら死んでたわ」

結界を張って攻撃を凌いだ

だがそれにしても場数をこなしているのか少年は表情の一つも変えない

「もう少し驚いてくれても良いのに」

「生憎、そういった対処をされるのは馴れていね」

「あらそう」

研ぎ澄まされた剣に熟練された太刀筋
相手はおそらく相当な実力者

「厄介なのは貴方だけではなく私も同じようね」

少し疑問に思った表情をする少年

私の感覚が間違っていないければ彼の体が発せられるのは妖力でもなく靈力でもないもの

ましてや彼が神な訳でもない

——じゃあ一体彼の体からは何が発せられているの？

「何が厄介かは知らないが俺に厄介なところがあるとすればこの凄
い身体能力だろう」

「良く言っわその得体の知れない力が厄介ではないと？」

どうやら相手を舐め過ぎてたようだ

並の相手じゃ感じられないようなほど抑えている魔力に気づくとはな

下手に動くとやられるな

「相手にしてるとどっちも只じゃ済まないぞ」

「そうね、だから一気に決着を付けるのでしょうか？」

「本気かよ……」

——何で手を引くという考えを持たないんだよ

やっぱり妖怪ってのは好戦的で単純な生物なのか
だが相手はかなり知識が高そうだ話して分かり合えない事はないだ
ろう

「ちょっと待て！」

「何かしら？命乞いなら聞かないわ」

「そうじゃないって」

強く打ちつけられる殺気と覇気が伝えようとする俺の心を折ってくる
だけどこで大暴れしてどっちも重傷なんて洒落にならないからな

「今回はお互いに手を引くってのはどうだ？」

「あら、それじゃいつまで経ってもここから出られないわよ」

「それくらいは俺の力で何とかしてみるさ」

徐々に当てられる殺気が引いていくのが感じる
きっと俺の言いたいことが伝わったらしい
安堵のせいで軽く吐息する

「つくづく面白いことを言う人間ね」

「それなりに力はあると思っているもんでね」

彼女は口を扇子で覆い表情を隠している
だがたぶん笑っているのだろう目を細くしているからな

「少し興味を持ったわ名前を聞かせてくれるかしら？私は『八雲紫』

「名乗るほどの者じゃないが『雨条刃』だ」

「そう、じゃあ刃、縁があればまた会いましょう」

そう言い彼女は謎の空間に入って姿を消した
たぶん、助かった

「なんだっ たんだあの化け物……」

嫌な汗が止まらなかった

下手したら死なない俺でも死んでたかも

「変な想像はあまりしない方がいいな」

さっさとこの場から離れる為に脱出の術を考えよう……

第二話 境界と矛盾（後書き）

とりあえず、東方キャラの登場と主人公の能力を紹介しておくための回のつもりです。

誤字、脱字や感想からアドバイスまでお待ちしております

第三話 理想郷（前書き）

とりあえずそれなりの推敲をしておりますが
誤字・脱字があるかも……
さらに変な表現も入っているかも……

第三話の始まりです

第三話 理想郷

理想郷

妖怪『八雲紫』に襲われてから大体、一週間が経った
現在は森の中でひたすら脱出の術を模索している最中である

「能力で有限と無限の定義を捻じ曲げてみたが駄目だったか……」

この一週間はずっと様々な事を試していた

空間を矛盾させたり

この脱出の不可能な空間を脱出可能になるかもしれない状態にする
為に定義を弄ったり

それはそれは様々なことに挑戦した

「この結界かなり厄介な構造だな……」

- - 頭がパンクしそう……

そもそも頭が良い訳でもないのにこれだけ能力を使用したら精神力
が削り取られて昇天しかねない
死なないけどな

さて、次はどんなものを矛盾させて脱出を試みるかな

「あと脱出を試みるなら……」

有と無……簡単に説明するとここの結界の存在を消せるように矛盾させてみようじゃないかということ

ただ言葉としての範囲が広すぎて消費される力も尋常じゃない……

「一旦休むとするか……」

今のパンクしかけている脳では無理だろうからその場で大の字になって目を閉じる

あれから一週間、未だ彼は脱出を試みている
はつきり言ってこの結界を破ることは不可能だと思っている

この結界は近き日に完成する『幻想郷』を維持するための結界の試作品だ

その道の達人でもそう簡単には破れるとは思えない

「刃はさほど結界には詳しくなさそうだからまだ掛るわね」

それにしても事あるごとに起きるこの不快な胸騒ぎは一体何だろうか……

——まさか彼の能力は……

自分の操る『境界』、それを超えるようなとてつもない能力なので

はと少し思考

だがこの結界は外との関係を断っているのだそれを通してきているという事は……

だが普通に考えてそれほど驚異的な能力が人間に覚醒するとは思えないにくい

もしそうだとしたら何か異常な所があるはずだ

例えば『死に執着』したりとか

「少し観察してみるのも一興ね」

スキマを開いて彼が視界に入る程度に静かに目を当てる

降り注ぐ日差しと耳障りな風の音に邪魔されながら目を閉じ思考を巡らす

——空間を能力使って触れることができないだろうか？

他にも様々なことを定義にしたり矛盾させたりと試行錯誤を行っている

「はあ……やっぱりあの時、命がけで紫を倒すべきだったかな……でも勝てる相手じゃないよな……」

吐息して色々後悔している

入るんじゃないかったとか紫を倒せば良かったとかその他諸々……

だが悔やんだところで現状が変わる訳じゃないか

「さ、もう一踏ん張りしよっかね！」

ぐつと勢いよく立ちあがり深く息を吸う

ゆっくり息を吐き小さく呟く

「空間と次元の定義を構築……我が名に従い力を行使する……」

今現在に働いている定義を捻じ曲げた、これで外の空間と俺の今いる空間を繋いでそこを通って脱出しようという考えである

もちろん出れたとしても疲れ果てているため家に帰るのはかなり苦
労するだろう

でも今ここで立ち往生するよりはよっぽどましである

能力が働いている間に脱出に向けて動く

まず刀を手に取り空間を裂くイメージで縦に刃を振り落とす
やこぼ

「頼むっ……！」

強く念じて一気に振り落とす

今、彼は間違いなく能力を行使している

それは間違いなく人間が持つような安い力ではない

これは境界すら凌駕する力

現に今、自分の能力を使ってスキマを開こうとしても全くもってその予兆が感じられない

もつと言つと体から能力を感じることもすらできない

「これは……一体どういう……？」

能力を封じる力というわけではないのだろう

ならばなぜスキマが使えない？

答えは一つ、彼の能力がそういった類のものに干渉できるからである

「すごい逸材が居たものね……」

私が求める理想郷の為に彼を利用しない手はない

彼がいれば『幻想郷』の完成もそう遠くないはずだからである

「雨条刃……面白い男ね」

「お、これはもしかしたら出られそうだな」

目の前にある空間の裂け目

中に入って通り過ぎれば出られるかもしれない

別に失敗して空間の狭間を彷徨い続けることになるならそれはまた
どうにかすればいい

「んじゃ行つてきますか」

やっと家に帰れると思いながら一週間を過ごした場所に別れを告げ
裂け目の中に入っていくその瞬間

「待ちなさい」

静止の言葉、声の主は女性である

「なんだ紫、今から帰る所なんだが」

「それは見て分かるわ」

「何の用があるんだよ」

「頼みごとを言いに来たのよ」

鸚鵡返しのように「頼みごと」と聞いた

俺は彼女がどんな頼みごとを言いに来たのか全く想像できなかった
なんて言っただってまだ出会って一週間の相手だし大層な話もしてな
いし

だから彼女の目的が何か全く予想だにしてなかった

「私はある夢があるの」

「夢？」

「そう、人間と妖怪が共存する世界を創ること」

「ほお、それはそれは大層、大きな夢があるようで」

「確かに夢物語かもしれないわね、でも実現できる気がするの」

人間と妖怪の共存

それはおそらく人間が猛獣と親しく共存するのと同じ事だろう
だが獣と妖怪では全くもって勝手が違う

この先の妖怪と人間の関係は『退治する側』と『何らかの怪異を人間に起こす側』のはずだ

つまり妖怪は人間に怪異を与え、人間たちを苦しめる

そして人間はそれに立ち向かい怪異を断つ為に妖怪を退治する

おそらくそれが人間と妖怪の関係であり妖怪の生存し続ける為の必須条件であるはずだ

「あんたの言っていることはとてもじゃないが簡単な話ではないぞ」
「そんな事は百も承知よ、だからこそそれだけの力を持つ貴方に頼みたいの、『私の描く理想郷を共に創らないか』」

理想郷、読んで字の如く

自分が思い描いた楽園ことでも言えば良いだろうか

「理想郷か……気が向いたら手を貸すよ」

「連れないわね、でもそうしてくれるとありがたいわ」

きっと何か面倒事になるだろうとは思っていたがこんなことになる
とはな

この先どうなるのやら……

第三話 理想郷（後書き）

今回は主人公の能力がどんなことができるを公開するために書いたようなものです

あまりにも強すぎるような気がしますますがもはやできてしまったものは仕方ない

第四話 客人（前書き）

とりあえず、感想で言われた句読点ですが、人が話している雰囲気が出る気がして敢えてつけない方針にしてみます。

読みにくいでしょうがご了承ください。

あと、刃の能力に関して活動報告の方に触れておいたので見ていただけると嬉しいです。

第四話 客人

客人

紫の頼み事を引き受けてから、約百年近く月日が流れた

何故そんなに飛んだか？

それはここ百年近くに大層な出来事が無かったからだ
それで現在は江戸時代と呼ばれる時代である

妖怪が最も活発な時代である
事実、この数日でかなりの数の妖怪に出会った、気がする……

都から一步外に出ればよりどりみどり、様々な種類の妖怪が居る

- 人間なのに知り合いは妖怪の方が多いのは、考えものだな……

最近の悩みである

俺を種族上「人間」にして良いのだろうか？

細かいかね

「深いことは考えないでおこう」

気楽に居た方が、人生長い俺には理に叶った生き方だろう

今更ながらこの不死化は能力上デフォルトの為に、以前話したのは
推測の範囲でしかない

多分、俺の中で定義だけを弄れる能力だと推測している

「暇だから能力の研究でもしようかね」

実際、まだ未熟な自分は能力の効果範囲やら、発動条件とかはあまり判ってない

ただ人には有り余る力だから、研究しておいて損はないだろうでも少し嫌な予感がする

因みに俺は今、自宅の玄関の扉の前に立っている

「この感じは……」

胡散臭い感じが胸騒ぎの原因だと思う

「はぁ……」と少し小さな溜め息を吐き出し、扉を開ける

「お帰りなさい」

「勝手に人の家に入るな」

あたかも自分の家のように寛ぐ紫が居た

「あらあら、百年の付き合いなのに酷い言いようね」

「人の生活スペースに勝手に入る方が悪い」

拗ねた子供のような素振りを見せる紫を尻目に茶の用意をする魔法を使って焚いた火を使って湯を沸かすそれを見て疑問そうに声をかけてきた

「貴方って本当に面白い力を持っているのね」

「魔力のことかな」

「それ以外に何があるのよ」

「例えば意味不明な能力とか」

呆れた様な溜息が聞こえた

出来上がった急須に入った茶を盆に置き卓袱台に座り湯飲に茶を注ぐ
とても良い香りが部屋に充満する

「んで、魔力が何か？」

「その『まりよく』って何よ？」

「そこからか……」

面倒くさいと思った

まあ相手は妖怪だから大陸産の技術はあまり判る分けないが……

軽く魔力と魔術の事に関して講義をしてやった
あくまで概念的なものと単純な理論だけだが

茶を啜り一息ついた紫が口を開く

「貴方って外国人？」

「何故そうなる……」

やっぱり千年近くも生きているとボケるのか？
明らか日本人だろ……俺は

そろそろ本題に入っていたくためにお茶を啜り一息ついて口を開く

「で、何の用だよ紫？」

「そんなに身構える様な事じゃないわ」

「前は空間把握の演算処理とか言って妖怪退治をさせやがって」

乾いた笑いを上げる紫

あの時は本気で殺してやろうかと思った

頭の中で何十桁の数字を暗算しながら戦ったんだ
全く迷惑な話だ

「あの時は少し私の計算が狂っただけよ、今回はそうならないようにするから」

「実際、お前の方が頭良いだろ、護衛ならやってやるが演算とか頭使うのはお前が適任だろうが」

面倒臭がりな奴って適任だと判っていても動かないから性質が悪い
そういった奴が大妖怪なのが更に酷い話だ

「今、少し愚痴ったでしょ？」

「そんな事はない」

誤魔化すのは意外と得意だ、あまり好まないが

なんだか段々と話がずれている気がしてきた

「とりあえず本題を話せ」

「今日はお茶しに来ただけよ」

「まじでこの場にて抹殺してやろうか……」

今、全力で殺気が出そうになった
こつという時は落ち着かなければ

「大妖怪が何故にこんな普通の人間の家でお茶をするんだよ」

「貴方のお茶が美味しいから」

「嘘言うなこのサボリ魔」

「ひどいわぁ」

くそBBAめ……

そろそろ堪忍袋の緒が切れそうだ

ここで一発ぶん殴るぐらいしても良いな？

「内心、殴ろうと思ったでしょ？」

「なぜ判った？」

「顔に出ていた」

俺の悪い癖をこの百年で見抜きやがって……

いや、百年も経てば気づくか……

「貴方って意外と顔に出やすいみたいね」

「昔からよく言われてた」

「あら、以外ね結構、無愛想だと思っていたけど」

「こつ見えて意外と顔に出やすいんだ」

この後、しばし二人で談笑しいた

第四話 客人（後書き）

とりあえず、今回の回は軽く時代を流す為程度のものとして紫との交友関係の発達を書き記したものです。

誤字・脱字がありましたら報告ください
感想もお待ちしております

第五話 友の友は亡霊（前書き）

今回はとても難産でしたw

戦闘シーン書くのはやはり苦手だ……

第五話 友の友は亡霊

友の友は亡霊

いきなりだが花見って素晴らしいものだと思う
美しい花を見るって言うのはとても優雅なひと時だと思う

「やはり桜は美しい……」

現在、俺のいる場所は、かの西行法師が住んでいた屋敷と言われている場所

この辺は沢山の桜が花を咲かせる

今の季節は丁度その見頃である

俺は屋敷へ向かう階段を上りながら桜を見物している

一応言っておくが、俺は飲み食いしに来たわけではない
本当の意味での「花見」をしにきたのだ

「この淡い桃色の花卉……儂くも美しい」

そんな風にのんびり花を見ながら階段を上ると、静止の声がかかる
声の感じからして少し若い感じのある男の声である

さすがに止まらない訳にいかない為、足を止め声の方を向く

「何者だ」

「他人に正体を聞く前に自分の正体を明かしただろうだい？」

「人の敷地に入ってきて大層な態度だな」

階段上らないと家主にすら会えないだろうが
こいつにお灸をすわしてやるか

でも暴れると家主に何言われるか判らないからな……

- - 癪に障るが大人しくするか

「俺は雨条刃、普通の人間さ」

「ほう、普通の割には変な力を感じるぞ」

こいつも魔力を気取る事ができる口か……
若干厄介だな

「あまり深い事を気にすると人生、生きていけないぞ」
「黙れ、おぬしよりか生きておる」

こいつ、まさか人外か……
でも、饅頭って例え方が一番納得できそうな変なもの浮いてるし人外か

「それよりもあんたは何者だ？」

「魂魄妖忌、ここの庭師をしているものだ」

庭師なのに腰に刀差してやがる……世も末って奴か？

にしても頑固そうな奴だな

話し合いで通してくれそうもないな

「おぬしは一体、何の用で来たのだ？」

「花見だ、桜を見に来た」

意外そうな顔をしゃがった

そんなに俺が花見をする様な人間には見えないか

確かに腰に刀差しているから、花見客には見えにくいかもしれないが

「なんだよ花見をしに来たら駄目なのか」

「本気で花見の様だな……」

当たり前だろ、人の家で飲み食いするわけないだろ

一体、俺はどんな扱いだよ

「嘘をついているようには見えないな」

「そんなくだらない嘘なんか言わないって」

意外と話の通じる奴なのか、はたまた単純なのか

初対面だから判らないが、このままなら中に入れそうだ

「だが本当とは思いにくいな」

「お前、人を疑うのは宜しくないぞ、主に人間関係的に」
「だ、黙れ！」

ひゅんと風を切る音と共に光を反射して輝く切っ先が目の前に来た
俺の一言が拙かったかな？

「貴様をこの場で成敗してくれるっ！」

「なんでこうなる……」

おそらく怒らせたと思う

・軽くあしらって家主さんに花見の許可を取るか……

「仕方ない、不本意だが通してもらうぞ」

腰の刀に手を掛けて脚に力を込める

「何があっても通さん！」

風を切る音と刃がぶつかる音が響き続ける

戦い始めて大分経ったが未だ互いに傷はない

「へえ、やるじゃん」

「おぬしも中々の腕前だな」

こいつの周りを飛んでる饅頭みたいなので、こいつの魂らしく、攻撃を行うことが出来る便利なものらしい

・あの魂が厄介だな……ただあれを切り落とすと後々面倒なことになるな

「どうした、降参か？」

「冗談を、ひよっこが俺に勝てると思うな」

眉間を寄せてぐっと睨んで来る

今の挑発に乗るなんてやっぱりひよっこじゃないか

「わしをひよっこと呼ぶか、おぬしは」

「俺から見ればまだまだだね」

俺が口を閉じた瞬間、ゴウツと周りの空気が乱れ始める
それと同時に妖忌からかなり高めの霊力が感じ取れる

「本気で来るか？」

「おぬしには手抜き不要と見なした、覚悟しろ」

静かな呼吸から感じる強い殺気は、おそらく俺を本気で倒す決意の
示しだろう

腰を低くし刀を握り締め構えを取る相手
刀を握ったまま何の構えを取らない自分

・ ・ 本気出さないと失礼かね？

「貴様……舐めているのか？」

「いや、本気になろうか、このままで受け流すか考えていた」

更に殺気が強くなった

・ ・ もうそろそろ来るか……

体全体に魔力を纏めて魔方陣を発動させる

「かなり久しぶりだが、ちょこつと本気出してやろうか」

「その前に斬るっ！」

地を蹴り一気に妖忌が間合いを詰めてくる

刹那、彼の手握られた刀が靈力を纏い俺に振り下ろされる

「現世斬っ！！」

自分の刀は間違いなく相手に向かった振り落としたはず、なのに攻撃したはずの自分が吹き飛ばされていた

「どうした、理解不能みたいな顔をして？」

「おぬし……一体何者だ……？」

目の前に立っていた人間は間違いなく同じ人物であつたはずだが今の男は背中に漆黒の羽を生やし服装も見ただことのないものになっっている

「何をしたというのだ……？」

「別に大したことはしてない解放時の魔力でお前を吹き飛ばしたただけだ」

本当にこやつは普通の人間なのか

「さて、決着をつけようか？」

今の俺ってとても悪役に見える

だって目の前の敵は完全に戦意を喪失している
少しだけ、本当に少しだけ力を解放したただけなんだが

「どうした、降参か？」

「たわけっ！」

- - 元気だな、威勢はないが……

このまま剣を振るっても無意味だと俺は思った
俺は刀を収め相手の手元を払う

握っていた刀はその勢いで手から離れ少し離れたところに落ちた

「終わりだ、お前に俺は斬れないさ」

「くっ……」

「通してもらうぜ」

「勝手にしろ」

膨れ上がる魔力を収め階段を上り始める

しばらく桜を見ながら階段を上ると屋敷が見え始めた

- -これはこれは豪勢な

敷地面積とか考えたくもないほどに広い
ただどこことなく、自分がいる世界とは別の世界のような感じがする

「少し寒いな……それより家に人がいるかね？」

気配は感じないが、別の何かは感じる

屋敷の扉の前に立ち人を呼ぼうとした時

「あら、刃じゃない」

「お、お前……何故此处に？」

こんな幻想的な所にこんな胡散臭い妖怪が来るなんて

- -意外と風流な奴なのかね

着物はこの時代のものとしては似つかわしくない物を着ていて
髪の色も金色と、明らか外国人としか見て取れない様な奴である

「ここの主人とは仲が良いの、貴方は？」

「花見だ、桜が見たくて来た」

「くっ……くっ……」

「わ、笑うな！」

そんなに俺が花見をするような奴には見えないかつ！
声に出したら負ける気がしたから止めておいた

笑う紫を尻目に屋敷の扉を叩く

トタトタと足音が聞こえる

「誰かしら？」

「貴女が此処の主人か、どうも花見客です」

「貴方が花見、あっはっは、可笑しくて狂いそうだわ」

このババアいつかぶっ殺す……

内心そう決意した俺である

背後で笑い転げてる紫を発見し屋敷の主人は花のような笑顔で其方を見ている

「随分と楽しそうね紫」

「だって、この男、あっはっは！」

「てめえ……覚悟しろよ」

もう駄目だ全力でこの大妖怪を叩き斬りたい

- - 我慢の限界だ

「てめえ……覚悟しろよ」

気付いた時にはもう遅かったわ

彼の足元は膨れ上がる魔力で抉れ、背中には四枚の白黒の羽が現れていた

たぶん生きてきた中で最も恐怖した瞬間だわ

「じ……刃、なぜそんなにどす黒いオーラを放っているのかしら？」
「てめえの胸に手を当てて考える……」

胸に手を当て目を閉じて考える

- - 少女考え中 - -

思考を巡らせて約一分、心当たりが多すぎて思い当たらないわ

「ま、まずは落ち着いて、深呼吸よ深呼吸」

「ああ、俺はとっても落ち着いているさ、てめえを三枚に下ろすためにな」

これは本気で拙いと思う

変な事言っていないなのに、殺気がどんどん増しているのは間違いかしら？

間違いなら良いのに

「さあ、命乞いの時間は終わりだ、三枚になるとミンチになるの、どっちがお好みだ？」

「どっちもお断りよ！」

「紫、お客様を嘲笑うからよ」

幽々子も見方じゃないの！？

確かに怒りの発端を作ったのは私だけど、友人なら味方しくれてもいいじゃない！？

「幽々子も楽しんでないで助けてよ！」

「怖いから嫌よ」

「味方は居ないみたいだな、安心しろ一瞬だ」

一瞬で本気でこの子、私を抹殺する気なの！？
本気で殺されそうなんですけど！？

「友人としての一生のお願いよ、幽々子助けてっ！」

「じゃあ、美味しい物宜しくね」

やっぱりそうなるのね……

でも命が助かるなら安いものよ

- - 数時間後 - -

やっとの思いで刃を説得し怒りを静めることに成功した
本当に死ぬかと思っ たわ

いや、一人じゃ死んでたわ

「本当に怖かったわ……」

「妖怪が人間を恐れてどうするのよ」
「でもあんなの誰だって怖いわよ！」

あれで怖くないなら一体何が怖いのか聞きたいぐらいだわ

いろいろ聞きたい所も有るけど、今の彼はとてつもなく機嫌が悪いから声を掛けると斬り捨てられそう

幽々子は私がスキマから取り出した和菓子を頬張っている

「それにしても彼は凄い逸材だと思うわ」

「そうね……あんな目に遭うのは願い下げだけど」

「あの時」に彼が居たら結果が変わっていたかもね」

あの時とは少し前に月で起こした月面戦争の事である
結果は惨敗だったわ

あれはあれで悪夢だ

「月の民百人と彼一人どっちが怖い？」

「刃の方が怖いわ、あれは人間ではないわ」

認めたくもない、あんな恐ろしい殺気を放つのが人間だなんて
大きく私は溜息を吐いた

屋敷の庭に咲き誇る桜を眺めている

さつき紫を本気で殺そうとしたが、主人である『西行寺幽々子』が、あーだこーだ俺を説得してきて最終的に俺が押されて今回は手引くことにした

「今度、同じことがあれば首を切り落として売り捌くか」

今、金銭的にちょっと不憫な俺である

大妖怪の首となれば相当な額で売れるだろう

いや、妖怪なら売れないかな？

「ま、そんな事はそのときに考えるか」

今はこの桜を堪能したい

見ているだけでとても心が洗われる

風も気持ちいい

「ん、あの桜だけ枯れてるな……なぜだ？」

大きく立派な幹を持つ花を咲かせてない桜が一本だけあった
寂しそうにだけどなぜか妖艶な雰囲気醸し出す桜があった

- - 死の香り……どこかで聞いたことがあるな……

確か、人の生気を吸い取って妖怪になった西行妖とかつて奴がある
って聞いたことがあるな

まさかその化け桜がこの桜って事なのか？

「これが噂の西行妖なのか……？」

「あら、聞いたことあるの？」

不意に隣から聞こえた声は幽々子のもだった

自己紹介をしてもらった時に、彼女は亡霊である事を教えられたがこの桜と何か関係があるのか？
でなければおかしい話だ

「まあ、話を少しだけな」

「そう、じゃああまりこの桜に近寄らないほうが良いわ、良い事ないし」

「そうするよ、まだ死にたくないし（死なないけど）」

そんなこんなで数分間ほど「白玉楼」なる場所に居座っていたお茶まで出して貰う羽目になった

こういう時間も生きるうえでは必要な娯楽だと思った

第五話 友の友は亡霊（後書き）

主人公がチートとタグに入れているのでそろそろ少しだけ本気を出させてあげようと思って書いた回ですw

今回出たのは全力の3割程度に考えています

いやあ、戦闘シーンを書くのは本当に苦労しました……
文才がないから言葉が出なくて出なくて

感想等々お待ちしております

第六話 久々の再開（前書き）

活動報告にあんなこと書いたのは良いけどなんだかねで何とか投稿

かなり急ぎで投稿したので推敲なんてやっていないという

そしてg d g dな展開

まあ、この小説は刃の生活日記みたいなものだから基本g d g dで
すかね

誤字や脱字があるかもしれませんが

拳句に表現がおかしかったり、話がかみ合っていないなかったりするか
もしれません

そう言ったところがある場合は感想のほうでご報告ください
では第六話の始まり始まり

第六話 久々の再開

久々の再開

花見を楽しんでから三ヶ月ほど経った

——桜を見るにはあと一年ほど待たなければならないか……

美しいものを見れなくなるのは心苦しいものだ

幽々子の方からは暇な時に遊びに来るといって言われたが、興味あるのは桜だけなんだよな

別に人が嫌いとかそういうものではない

「夏になってから一気に暇になったなあ……」

桜が枯れて娯楽がなくなってから家で日向ぼっこをする日々が続いている

本気でやることがない

暇すぎるのも考えものだな

「よし、今日こそ能力の研究をするか！」

花見に夢中になっていてずっと忘れていた

だが何をすればいいのだろうか……

——単に能力を発動すれば良いってもんじゃないだろう……

こういう時に同じような意味不明の能力を持つやつがいると楽なんだけだな

「まあそんなこと言って運良く紫が来てくれるとありがたいのだけ

どな」

「紫じゃなくてもいいなら教授してあげるわよ」

妙に聞きなれた声、幾度か感じたことのある雰囲気

「ざつと計算して二百五十年ぶりだろうか『涼』」

「うふふ、久しぶりね刃」

不意に現れたのは俺の姉の『雨条涼』（うじょう りん）

感じとしては「りよう」と読むが、親の頭が弱いのかこの漢字で「りん」と読むらしい

こつちに来ていることから何かしら変な能力に目覚めているだろう
ましてやただの人間なのに、二百五十年も経った今でも生きている
のだ、能力がない方がおかしい

「んで、今更この俺に何の用だ？」

「連れないわね、愛しの弟をやつとの思いで探し出して感動の再会
なのに」

「どこが感動だ、人ばこんな世界に飛ばしやがって、おかげで変な
能力が覚醒しただろうが」

「あら、力の使い方が安定してきているのは、その能力のおかげじ
やなくて？」

「それとこれとは話が別だ、大体なあ……—」

——口論を始めて約三十分が経過

口論を始めて大分経った、互いに疲れて終結してしまったというのが結果だった

「まったく……んで何の用だよ」

「愛しの弟に逢いに來たの」

「あっそ」

全くもって気色の悪い姉だ、いい歳してブラコンってさつさと恋人探して離れて欲しいものだ

「気色悪いとか思ってたでしょ」

「正解」

「ひどいわぁ」

こいつも若干だが紫みtainな性格しているな

「BBA」って言うても怒らないのは良い所だが

「本当は貴方だけじゃなくて『沁華』も連れてくる気だったの」

沁華ってのも俺の姉だ、名前は凄くおしとやかに聞こえるが性格は男勝りだ

涼はどうやら俺だけを探していた様子だ
皆のこと探し出したのかな

「『輪廻』はどうした？」

「貴方ってホント妹だけ気に掛けるわね」

「そりゃあ心配するだろ」

『輪廻』は俺の妹で治癒術がとても得意なおつとりした少女だ
弁解しておくが俺は『シスコン』ではないからな

こついうのって弁解したほうが怪しいとか聞いたな……

「輪廻も一応は発見したわ、でも来れるとは思えない状態だけど」
「なんだ怪我でもしているのか」

「そんな訳ないでしょ、集落で崇められちゃってるのよ」

ああ、あいつ誰しも構わず治療するから、奇跡の力とか言われてしまふことがしばしばあったな
今回もその口かな

「それにしても喉が渴いたわ」

「茶は出さないぞ」

「ひ、ひどいわ、刃の鬼畜、外道、サディスト!」

「なんとでも言え」

俺を執事か何かと間違っているんじゃないのか……
前から家事はすべて俺がやっていたしな

全く、二十歳になっても茶の一杯も淹れられないとは

「というか、茶を淹れないだけで鬼畜なのか」

「多分」

「そんなんで鬼畜とか世の人間の器が小さすぎるだろ」

物欲しそうな顔をする涼を尻目に茶を啜る

「そついえば貴方、『力』の方は大丈夫なの?」

「『暴走』の事か？」
「ええ」

そつえばそんな心配があつたな
花見に行つた時に侍の前で使つたつけな

別にこれと言つて体調が悪くなつたりはしなかつたな

「最近はそついつた予兆が感じられないな」
「やつぱり貴方は異常だわ」

能力柄こういうのも消えてしまつたのだろうか

だがあの時に使つた時はかなり安定していた気がした

「感情に左右されなければ安定するのだろつ」
「まあ、そついうもんよね」

それで片付けるのはどうかと思う

俺の力つていうのは『矛盾と定義を弄る程度の能力』のことではなく
発動させると俺の「魔力」や「身体機能」などといった戦闘能力に
関した面を、飛躍的に上げるものの事で

俺や姉弟の間では『天魔』つて呼び方している

呼び方の由来は発動したときに、天使のような白い羽と悪魔のよう
な黒い羽が生えることからだ
単に発動しただけなら黒い羽だけが具現化する

後、いくつかの形態があるのか力を解放すると、羽の数が増えたり

体に刺青が現れたりとする

刺青というか魔法陣の一種で黒い線なんだが……

「なんだかんだ言って俺って異常なんだな」

「そう言っただけで所詮は運命とはそんなものよ」

運命とは皮肉なものだ……

なんてかっこつけてみる

実際はこんな体でも便利だと思っただけから文句はないが
普通というものを体感してみたいと思ったりもする

人間って不思議なものだよな

「貴方って思考がいちいち変わるわよね」

「人の思考を勝手に読むな」

変態め……

「今、変態とか思ったでしょ？」

「だから人の思考を読むな！」

駄目だおそろくこれは「無限ループ」に違いない

こんなグダグダな話をしている前に一つ疑問を解決しよう

涼が登場した時、「紫じゃなくてもいいなら教授してあげるわよ」
と言った

「紫じゃなくても」って見ず知らずのやつを呼び捨てにするか？
いや、頭の弱い涼ならあり得るか

「貴方ってそんな毒舌だったかしら？」

「時の流れってやつだろ、ってまた俺の思考を読んだな」
「とてもよく表情に出ているわ」

完全に考えが読まれている気がする
もうヤダこんな姉

「本当に貴方は顔に考えが出るわね」
「お前が出させてるようなものだろ」
「人の所為にしないでほしいわ」

この野郎……この場であの世に送ってやろうか……

でもなんだか「やれるものならやってみろ」って言われてる気がする

「それで、私に何か聞きたいことでもあるんじゃない？」
「そこまで分かっているのか……」
「はやく本題に入らないと飽きてしまうわよ」

一体誰がだよ
言われるがまま渋々口を開く

「お前、紫のこと知っているのか？」
「『お前』じゃなくて『お姉さま』って呼んでくれたら答えてあげる」

この瞬間、本気で人を手にかけることに戸惑いがなくなったかも
一瞬だけ殺気を全開にした

これって怒りを爆発させてもいいってことだよな？

「刃、ちょっとだけ落ち着きなさい、こんな所で暴走したら止めようもないわ」

「お前が発火剤だろうが！」

もうそんなこんなで漫才を続けて一時間が経過するのであった

「やっと本題に入れるな」

「で、私と紫の関係だったっけ？」

「その通り」

最近、「本当の俺」ってものを失いかけている気がする
昔の「冷静沈着で物静かな俺」はどこに行ったのだろうか……

何？過大評価しすぎだって？ほっとけ

「まあ、あれよ女友達ってやつよ」

「なんだ面白みのない発言だな」

「黙らっしゃい」

ここで「天敵」とか「好敵手」とかって台詞が出たら面白かったのに……

思わず舌打ちをしてしまった

涼がどんな奴と交友関係を築こうと俺は知らんが「趣味悪いな」

お前も同じってか？分かっているつもりだ

「で、もう一つ知りたいんでしょう?」

「お前、占い師やると儲かるぞ」

「あら、私が占い好きじゃないのは知ってるはずでしょう?」

「はっはっは」

なんだか俺が話すと話がずれていく気がする

もうやだ、早く涼から離れたい

「もういいよ、早く帰ってくれ」

「あら、偉大な剣士様がこんなか弱い美女を妖怪の蔓延る山に投げ出すなんて」

「うるせえ! 何がか弱いだ! ふざけ倒すのも大概にしろよ! 年増!」

「誰が年増よ」

このあと四日ほど山に百ほどのクレーターが出来る姉弟喧嘩が続いたのは単なる余談である

勝ったのは俺だけだな

第六話 久々の再開（後書き）

今回の目的は「刃の姉を登場させること」です

少しばかりここでキャラ設定を

名前 雨条 涼うじょう りん

性別 女

年齢 二十歳（全然、年増って年齢じゃないよ）

容姿 髪は腰まで長く色は淡い青、瞳は赤い、顔立ちはまさしく絶世の美女（作者の中では美人）身長は一六五？と女性にとっては普通、胸は大きい方

能力 これは近いうちに出しますので今は内緒です

まあ、能力は厨二丸出しなので出た時は鼻で笑ってやってください

感想等お待ちしております

また次回にお会いしましょう！

第七話 不死鳥と異端（前書き）

なるべく原作キャラを出していきたいと思っているんですが、オリキャラが2人以上となるとやはり出る機会が少なくなってしまうですね

これからの話ではなるべく登場させていこうと頑張っていけますが今回はある原作キャラを登場させました

第七話 不死鳥と異端

不死鳥と異端

現在、喧嘩が終息して一息ついているところである

互いに怪我はほとんどないが野生生物が住むのは不可能になってしまった状態になった

「まさに焼け野原だな」

「まさに焼け野原ね」

目の前に広がる景色は周囲の草木を焼き尽くした地獄絵図である

「「ついやっちゃった……」」

さて、このままだと自然に申し訳ないので修理にかかる

まあ修理と言ってもあったことをなかったことにするだけだが
どうやら涼の能力は「有と無を操る」ってことらしい

つまり事実として「有った」ものから「無かった」ことにしたり、
事実として「無かった」ものを「有った」ものにしたりとかなり万
能な

能力である

「元通りになったわ」

「すごいな、瞬きしてただけなんだが」

目の前に広がっていた景色が一変した、瞬きしているその一瞬で

これを見ていると色々試したくなるな

例えば何も無いところから食べ物が出てきたりすると面白そうじゃないか

「便利そうな能力だな」

「そうね、『過去に起きたことに対しては便利』ね」

「どういう意味だ？」

「説明すると面倒だし見せた方が早いわね」

そう言つて草を一筆りして目の前に広げる涼

そのあとすぐに筆られた草が意志を持ったかのように動き出して元通りになった

「ほお、面白いな」

「この能力は正確に言つと『過去の事象の有無を操る程度の能力』ね」

めちやくちや遠まわしな能力だなもつとストレートな能力はなかったのか

まあ涼にはお似合いの能力だな

意外と魔力やら体力やらを浪費するらしくつつすらと汗が滲んでるのが窺える

「随分と労力を使うらしいな」

「これだけ広範囲に力を行使すればこうなるわ」

それにしても体を吹き飛ばされても能力を使えば無かった事にできるといふのはかなり脅威だな

こういう能力の対処を考えておいた方がいいな

俺も意味不明の能力持ちだがな

「さて、少しだけ休める場所を欲しいわ」

「俺の家は却下な」

「ひどいわぁ」

だって髪の毛が長い人ってすぐにそこら辺に抜け毛が落ちるじゃん
掃除するの面倒なんだもの

まあもうそろそろ幻想郷の方へ移住するつもりだし取り壊すつもり
なんだがな

「さて、俺はそろそろ動きだすかな」

「どこか行くの？」

「幻想の郷があると聞いたからな」

そう、百年という昔に出会った胡散臭い大妖怪『八雲紫』が掲げる
理想郷である

俺はその理想郷の創造の手伝いをする代わりにそこへの移住を条件
にしているのだ

ただ未だ理想が完成しているとは思いくいかな

「あら、あなたも幻想郷に行くの？」

「あなた『も』？」

「輪廻もあっち側にいるわよ」

なるほどな、確かにこの時代に小さい集落とかに医者類はいない
だろうからあいつが崇められているのか

そもそも戦いにおいても申し分ないしな

なら久々に妹の顔も拝めるのか

「そりゃ好都合だ」

「どこが好都合なのかしら？」

「あっちなら退屈もしないだろうし大怪我しても問題なさそうだしな」

そう、妹の輪廻は医療術に対しては名医と呼ばれる医者なんかでは話にならないほどの技術がある

究極の禁術でもある死者の蘇生すらも成し得るほどだ

面白い場面も見れそうですますます行きたくなってきた

「もう幻想郷に入ろうかな」

「輪廻をからかいに行くのかしら？」

「そんなわけではないだろ」

妹を弄る趣味はない

俺の性格って他者からはどう見られているのだろうか？
今気にすることでもないか

「じゃ、俺は行くぜ」

「小屋はどうするの？」

「好きにすればいい」

「じゃあそうさせてもらっわ」

「後始末はお前に頼むがな」

「じゃあやっぱり止めるわ」

ちっ……上手くいかなかったか
仕方ない暇を見つけて片付けに行くか

今は向こう側に行きたい
今の俺は「好奇心の塊」だからな

あのあと涼とは言葉を交わさずすぐに別れた

得意の高速移動を使って幻想郷の結界の近くについた

高速移動の原理はまた今度軽く説明させてもらう

「ここが我が人生の終点となりうるのか……楽しみだ」

格好つけているがあまり深い意味はない

さてこれから色々厄介事が出てくるぞ
まずは衣食住だ、衣と食はまだ自身で何とかできる住だけはすぐにとはいかないからな

「やっぱりあの小屋持ってくるべきだったかな」
持ってくるってばらして使える部分だけを使ってもう一度小屋を建

てるという意味だ

ただこの方法をとると、どんどん家が小さくなっていくんだよな

能力で空間の定義を弄って広くできないかな

無理ではないだろうけど……

「そんなことより今を楽しむとしようか……では、別世界へ参ろう」

腰の剣を縦に一振りすると空間が裂けて真っ黒な裂け目が現れる
我ながら定義を弄るとはなかなか便利だと思う

裂け目に入り軽く前進するとすぐに景色は変わりあたり一面が草原
となった

「これは大自然がおでましだな」

とりあえずこの世界を探検するべく歩みを進める
風に任せて自分の直感と本能に任せて歩きだす

確かこの幻想郷は人間と妖怪の共存を目指していたはずだ
つまりここの妖怪は人間を襲う事は……

今まさに襲われそうだからそういう訳でもないみたいだな

「これはびっくりよく居る低級の妖怪も居るのか」

見た目はそうだな熊と虎を足して割る二した感じだ
手は大きく鋭い爪と巨大な体躯、そしてなかなか柔軟みたいだ

ただこれは妖怪と言うよりか化けものだな

「着た途端に襲われるとは後が思いやられるぜ」

だが所詮は低級妖怪だ

俺の太刀筋の前ではただの的である

腰に差してある刀に手を添え肉眼では視認できない速度で居合いを放つ

目の前の化けものは弱々しく倒れその巨体を地に任せる
鮮血が辺りを赤く染める

「でかくても力がなければこんなものだ」

刀についた血を払って鞘に収める
さて、気を取り直して探索と行こう

まず近くにある興味をそそるものは……
この竹林だな

「霧も立ち込めているな、迷いやすそうだ」

迷うのはもう慣れたがさすがにこれは入る気もなくなるな
だがそこに何かありそうだから入ることにした

「昔もあつたな興味本意で入って迷って酷い目にあつたの」

確かあれが紫と初めて会った日か
意外と昔に感じるものだ、時が経つのは早いものだ

「周りにあるのは竹、竹、竹……」

やばい、方向感覚が完全に狂った
こりゃ迷ったな

しかもここも妖怪の気配がするし……

こんな辺鄙な竹林に人の気配が感じられる
単に筍狩りっただけならこんな所には誰も来ないはず
この辺では迷いの竹林として誰も訪れない場所である

「迷い込んだなら大変な事になる……」

放っておくわけにもいかない幸い気配もそこまで遠くない急げばす
ぐに追いつく

この竹林は妖怪も多いから出来ればすぐに見つかってほしい……

すぐ近く、こつちに近づく人と妖の感じを放つ存在

「半人半妖か？だが気配は果てしなく人に近い」

もしかしたら妖術を操る人間でもいるのか？

だがそんなはずはない

元来、妖術とはその名のとおり妖怪が持つ術であると聞いている
それに人と妖怪では力の源が違う

人間には個人に差があれど『靈力』と言われるものが宿るとされている

そしてそれを用いて様々な力を発揮するのが『靈術』と呼ばれるものと聞いた

その靈術を用いて妖怪を退治するものたちが『陰陽師』と言われる

逆に妖怪には『妖力』というものが宿り

それは妖怪の『力』そのものであるとも言える

生きた年数が長くなればなるほどその強さは増していく

「だったらこの人間から感じる妖気は一体……？」

長い思考を続けていると人影が少しずつ浮かび上がってくる

感覚的にさっきから感じてた奇怪な人間である

影の形からして性別は女、体系はとてもじゃないが大人とは言えない、むしろ子供っぽい

背はあまり高くない体のラインもあまり女性らしくない年齢的には十五歳ほど

徐々にはっきりと見えてくる、長く白い髪、札のようなもので束ね

ている

赤いもんぺをはいた少女である

「なんだ、こんな辺鄙な所で少女がいるなんて」

「あんたこそなんでこんな場所に？」

この子はこの竹林に住んでる的なパターンか……
それとも地形に詳しいのか？

見た感じ戦いを出来そうな体つきではない、華奢な方だろう
色白で愛らしい顔をしている

「なぜ……か……好奇心としか言えない」

「好奇心でこんな危険な場所に来るのか……」

そう言われてもな……

俺自身その場の感情で動くことが多いからな
特に好奇心や探究心は強いほうだと言われる

「にしても面白い場所だな、入って大した経つてもないのに迷う
なんて」

「今、自分がどういう状況だか理解している？」

「いや、全くしてないな」

「……あんた馬鹿でしょ」

馬鹿とは酷いな、こう見えてもかなり勉強であれば上位のほうだ
かといって一位でもないが

学業は苦手だったんでな

「とりあえず適当に歩いていけば出ることも出来るだろう」

「そんな事言っていたら餓死するよ」

「大丈夫、訳ありで死にたくても死なない体だから」

死なないと言った途端に目を丸くして仰天する少女

死なない人間なんて学術上でも歴史的にも珍しいだろうな
というかありえない話だからな

「あんたも死なないのか」

「正確には『死ねない』だがな」

彼女の口ぶり、おそらく同じく訳ありで不死なのだろう
見た感じ大分長く生きている雰囲気も感じたからな

「そついえばまだ名乗ってなかったな、雨条刃、ただの旅人だ」

「藤原妹紅だよ」

藤原……確か竹取物語の時代のお偉いさんに同じ名前の人がいたはずだ

だが娘がいるとは聞いていない、ということは『隠し子』ってことか？

面白いこともあるものだな

だが藤原妹紅って事はもう五百年とか昔の人物だよな
って事は不老不死か……

「随分と辛い人生を歩んでるようで」

「な、なによ、同情して欲しいわけじゃ」

「短い時を過ごす人間に永遠なんてまさに地獄だよ」

生き地獄、不老不死に与えられた罪を償うために与えられた罰
俺はそんな風に思っている

ただ不老不死がなんで罪なのかは知らないし興味もないが

「それはそうだけど、あんただって同じでしょ」

「まあな、否定はしないけど、俺はこの永遠を楽しんでいる」

「楽しむって、いつかはその楽しみも失われるよ」

「だったら作ればいい、自分の楽しみを」

それが俺の生き方であり、生きるうえでの道標である
だから今回も楽しそうなこの竹林に足を踏み入れた
そんなんじゃないければこんな場所に入るのは御免だ

「それにしても竹ばかりで思った以上に楽しいものはないな」

「あんたは此处を何だと思ったのよ」

「そうだな、千載一遇のチャンスがある場所」

「そんな良いところには見えないけど……」

千載一遇を狙ってはいないが少しばかり楽しみがありそうだったと
は言える

それで妖怪に襲われても大した問題でもない
出られなくなったら少し問題だが、そんなときは地形を変化させれ
ば良い

例えば霧を竹ごと吹き飛ばすとか

「それよりも妹紅はこんな所に居ても大丈夫なのか？」

「私はこの辺なら詳しいから、出口へ行きたいなら連れて行くけど」

「ほお、それは頼もしい是非お願いしよう」

出口への道を知っているか……

随分とこの竹林を知り尽くしているようだな

こういう人材は仲良くしておいて不利に働くことはないな
少し友好的になってみるか

「ここが出口だよ」

「よく、憶えているな、あれだけ方向感覚の狂いやすい場所の地形を記憶するのは並の人じゃ無理だろ」

「そりゃそうだろうね、あんたみたいに来るのが初めてなら案内人を用意したほうがいいよ」

「なら今度から妹紅に頼もうかな」

くつくつと笑って彼女は竹林に戻って行った

見知らぬ誰かと触れ合うのも悪くない

第七話 不死鳥と異端（後書き）

と言うことで今回はもこたんinしたお

うちの小説のもこたんはなるべくじゃじゃ馬娘みたいな口調を目指しました

作者はもこたんの見た感じの年齢は現代の一五歳ほどの少女ぐらいだと勝手に思い込んでいます

だって、昔の人って高くても150センチほどが高いラインだったてきいたことあったんだもん

感想やアドバイス等々お待ちしております！

第八話 幻想の賢者（前書き）

今回はのんびりした雰囲気を出したかったです

あまり需要のない回かも……

第八話どうぞ！

第八話 幻想の賢者

幻想の賢者

藤原妹紅と別れて今、俺は幻想郷にあるとある神社を目指している
名は確か『博麗神社』と聞いた
その巫女は妖怪退治も行っている聞いたからな、どんな人間な
のか興味を持って行くことにした

そしてその神社への道を聞くために人里に向かっている所である

「人里へ行くだけで一体どれほどの妖怪と出くわした事か……」

そう、人里に行きたいのにもう十体ほどに襲われた
俺は襲われやすい体質なのかもしれない

襲われやすい体質なんて考えたくもないな

「のんびり歩いていると本当に日が暮れるな」

主に妖怪に襲われてその対処して時間がかかる

やはり此処は……

「久々に空間を弄るか」

能力を使えば瞬間移動も容易い事であることが少し前に発見できた
大分昔に発見したからちゃんとできるか心配だがやるだけの価値は

あるだろう

「確か、あれをこうしてこれをこうして……」

鈍った感覚を取り戻すかのようにゆっくりと能力で定義と矛盾を弄っていく

これは着いたところには疲れ果てているんじゃないのか？

「ふう…… やっぱり止めよう、疲れ果ててしまつたら元も子もない」

仕方なく歩き出す

しばらく歩くと薄っすらと人影が見えてきた、おそらく人里の入り口に立っているのだろう
その後方には家のような形も見えて取れる

「到着かな、歓迎してもらえると嬉しいんだがな」

俺も一人の人間だからな、歓迎されたら嬉しいものだが、何となく嫌な予感もする
何に対してかはよくわからないが

「まあいいか」

目の前にお世辞にも立派とは言いにくい門とそこそ良い体つきの男が立っている

おそらく門番だろう、妖怪の侵入を防ぐために

「待て」

「なんだ、ただじゃ通してくれないのか」

「見ない顔だ、注意を払って損はない」

随分と仕事熱心な事で、だがこう言われると少しいらつくな
争い事は避けるべきだが……

「見ての通りただの人だよ」

「人の形をした妖怪だっている」

確かに紫とか妖力を感じなければただの人に見えるよな

だったら警戒されても無理もないか

拳句に腰に刀差してれば間違いなく警戒するか……

「んじゃ通してもらうにはどうしたらいいんだい？」

「人である証明をして貰いたい」

無理難題を……

俺はただでさえ人とは離れた状態だぞ……

あるいは害を与える気がないってことを証明すればいいのかな

無理だな、口で言うのは簡単だが信じてもらうのは難しい
だったら実力行使か……なおさら駄目だな

「はあ……証人を連れて、出直すか」

そう言つて去ろうとして時

「やっと、見つけたわ刃」

女性の声、やたらと聞きなれた大妖怪の友人の物である

「お、丁度いい所に偉人発見」

「その利用しようとしている態度は何？」

ちっ……勘の鋭いやつだ

だがこちとら借りつてもものがあるだから構わず利用するぜ

「この幻想郷に『博麗神社』っていう凄い神社があるって聞いてな」

「そこに行きたいのね」

「その通り」

なんか顎に手をあてて考え始めやがった
嫌な予感がしてきたぞ

「じゃあ、私について来て」

「何かわからないが良いだろう」

そうするとスキマを開き中へ入っていく紫
続いて俺も入る

前よりも不気味には思わなくなったがやはりこの空間の目玉は不気味だ

「なあ、紫」

「何よ」

「この空間のデザインを変えていいか？」

「駄目よ」

駄目か……持ち主が言うなら仕方ない、我慢するしかない

不意に立ち止まる紫に危うくぶつかりそうになりながらも足を止める

「どうした？」

「到着よ、私の屋敷に」

神社じゃないのか、がっかりだ

何か重い雰囲気だがあまり考えない方が良いか

どうかで考え事や説明は失敗の元だと聞いた

周りの風景が目玉から木造の建物に変わった

「お前の屋敷ってここか」

「そうよ、まあ座りなさいな」

居間らしき場所なのだろう、卓袱台ほどの高さの机と座布団が敷いている

紫の反対側の座布団に腰を下ろす

「で、こんな所に連れて来て何のつもりだ？」

「ただ単に貴方とお話したくてね」

こんなババアに惚れられても全くもって嬉しくないな
大丈夫思い過ぎだ

「お話って？」

「それよりもお茶を出すわ『藍』お願いね」

少し遠くから紫とは別の女性の声が響いた
おそらく紫が『藍』と呼んだ人のものだろう

「使い魔か？」

「使い魔って何よ式神よ」

そうか、こっちでは使い魔なんて存在しなかったんだった

式神って確か……

陰陽師達に使役された妖怪の事を言うんだっけ？

それで有名なのが『前鬼・後鬼』とかって鬼なんだよな

式神ってどんな妖怪でも対象にできるのかね

「それで、話ってなんだよ」

「身構えなくてもいいわただの世間話よ」

妖怪の世間話って一体どんなものなんだよ

「身構えなくていいって言われてもどんな話題を振られるのか分らないしな」

「用心深いのね」

「昔からさ」

そう会話が一区切りした所で式神の『藍』が盆を持ってやってきた

黄色の髪と九本の尻尾を持つ美しい女性の姿をした狐の妖怪だ

「お茶をお持ちしました」

「「どうも」」

湯呑を俺と紫の前に置いて部屋から去って行った

「ずいぶんと静かな性格だな」

「まだ慣れてないのよ」

「日が浅いのか」

どうやら最近になって式神にしたらしい

経緯はわからないが九尾の妖狐なんて早々出会えるものでもないぞ

「そんなことより本題に入ろうか」

「そうね、貴方には色々とこの世界での決まりを教えなければなら
ないわ」

「ご教授願おうか」

どうやら俺の目的は分かっているらしいな

「大した決まり事なんてないんだけどね」

「そう言うと思ったよ」

「でも住む場所を求めるならできるだけ人里の中にしてね」

「なんでだ？」

「それはやっぱり色々面倒になるからよ」

どこがどう面倒なんだ……

住む場所なんて俺の好きでいいだろ

「住む場所なら俺の勝手にさせてもらいたい」

「貴方を野放しにしたら貴方を襲う妖怪が消えていく気がするわ」

「今から全滅させてもいいが」

「ダメ、絶対」

冗談なんだがな

まあ、危機に陥ったரசさすがに抵抗するが襲われなければ攻撃はしない

「とりあえず面白い場所へ行きたい」

「そんなこと言われても貴方の『面白い』の定義が分らないもの」

「ドンパチできればそれなりに面白いぞ」

「戦闘狂丸出しのセリフね」

俺は断じて戦闘狂ではない！

決闘を見るのが好きなだけだ

ただ最近は命のやりとりと言った危機感を煽る戦いをしてないから
ちよつとだけ欲求不満かな

「最近は緊迫感ある戦いをしてないし少し物足りないんだよ」

「貴方より強い奴なんてまず居ないわよ」

「探せばそこら中にいるだろう」

俺自身、自分が強いなんて思った事は一度もないがな

他人には普通より頭が一つ二つ抜けて強いと言われる

人がどう思おうが俺には関係ないがな

「もう行っていていいか？日が暮れる前に寢床を確保したい」

「なら泊って行きなさい、久々に会ったんだから一杯やりましょう」

「……お言葉に甘えよう」

その後、紫と飲み比べをしてすぐに紫が酔い潰れたのは余談であった

第八話 幻想の賢者（後書き）

二話振りの紫です

この小説では紫さんはかなり登場しますw

何分、原作キャラで今のところまともに会話が弾むキャラは紫しかないんですもん（↑言い訳

次回あたりに白熱するバトルシーンを描きたいです！
出来るかは分かりませんがw

第九話 久々の再開（前書き）

すみません、先に言っておきます。
今回は原作キャラは一切出ません

紫様の活躍などを期待していた方には謝罪の意を
申しわけありません

では第九話をお楽しみください

第九話 久々の再開

久々の再開

紫に一晚だけ宿を貰った翌日、二日酔いで紫が起きれないらしいから一言礼を言つてその場を去った

今、俺は人里の中にいる

どうやって入ったかと言うと、紫が手を回していたらしい

「全く、お節介な奴だ」

だが感謝はしている、俺にとってこの里は色々世話になる予定だからだ

人里に入りたかったのは『博麗神社』への道を聞くためだけではない妹である輪廻の居場所も知るためである

涼の話だと輪廻と涼自身は幻想郷のどっかに住んでいるらしいそれで輪廻は人里で随分と崇められているらしい

そんなことから輪廻を探すために人里に入れば手早く見つかるかもしれないという魂胆である

「どいつに聞いても『輪廻様』か……あいつは一体どんな能力に目覚めたんだ？」

単純に考えるなら「生命力に関した力」であるのがごく自然な考えだ人間には生きるうえで必ず『生命力』と呼ばれる物を秘めている

その生命力がどんな形で存在するかは分からないが、おそらくそういったものを一時的に強化する事が出来るのだろう

「これはまた興味深い能力を持ったようだな」

あともう一人の姉の『沁華』の方も興味があるな
こいつは涼から情報を貰わないと探しようが無いがおそらく俺の想像通りの能力を持っているだろう

それにしてもこの人里、思った以上に広い……

「こりゃ、輪廻を探すのはまた次の日になるかな」

それにしてもこの人里……『医者が居ない』

とどのつまり、病や怪我になった時にどうするのかが気になる

「まさか輪廻の奴が医者を凌駕しているから衰退して言ったのか……？」

基本的に魔道の世界には一般的に火などを作り出す有名な『魔術』
様々な姿をした者呼び出す『召喚術』など数種類存在するが、『治療術』と言うのは存在しない

というのも、人体に被害を与えるのは簡単だがそれを再生させる技術は誰一人として開発、及び発展はしていないである

その治療術の元祖が俺の妹の輪廻である

全てにおいて死者を蘇らせるのは禁忌とされてきた、俺は何故かは分からないが昔からそう言われているらしい
だが輪廻の治療は『死者蘇生』おも可能にしている

医者では治せない怪我や病もあいつなら治療できる

だからあいつが『神の子』だとか『天才』などと呼ばれやすい

そういった能力の類なら「生と死に関した能力」と考えて方が無難になる

「だがそしてら一部だけ辻褄が合わなくなるな……」

もうこの思考は捨てよう

このままだとこの考えの答えを見つけるまで何日かかるか分からない

「ちょっと疲れたし団子でも頂るか……」

丁度、目の前に腰掛が置いてある店がある

団子の二文字もあるところから店なのだろう

金ならあるし住まいのほうはまだだが、能力で別空間に移動して雨風をしのぐつもりだから使っても大丈夫だろう
一皿と茶を頼み腰掛に座る

「団子を食うなんて随分と久しぶりだな」

甘いものは好きな方だ、好んで食べたりはしないが嫌いではない

料理は比較的得意なほうだと思い込んでいる

「俺の舌には少し甘過ぎるかな」

お茶を啜りながら団子を頼張る

「隣、良いですか？」

女性の声、どこか聞いたことのある懐かしい声だ
相手の方に顔を向けると腰まで掛かる長い黒髪が目に入った

「どうぞ」

影の動きで軽く会釈しているのが分かる
顔は見ないのかって？誰だかもう分かるだろ

「随分と懐かしい顔だな」

「そういう兄さんも変わってないね」

「久しぶりだな『輪廻』」

「久しぶり、兄さん」

隣に座った女性は俺の妹でこの里で人助けをしている輪廻本人だった

黒く長い髪、漆黒の瞳、少し幼い顔つき
相変わらず可愛い顔をしている妹のである
シスコンって言うな、分かっているつもりだ

「甘党のお前の事だから甘いものがある場所になら出沒すると推測
していたら本当に会うと思わなかった」

「探してたんですよ、兄さんらしき人物の目撃報告を耳にしたから」
「なんだ、団子目当てじゃないのか」

「少しがっかりしているみたく聞こえるのは何故だろう？」

「気の所為だ」

甘いものを食べてる輪廻の表情が愛らしいなどと本人の前で言える

わけ無いだろう

それにしても周りからの視線が刺さるのは何故だろう……

「なあ輪廻」

「なんでしようか？」

「周りの目線がとても気になるのは何でだと思う？」

「さあ？」

ただの気のせいだろうか？

少なからず敵意が向けられている気がしなくてもない
ちらほら殺気に近いものも感じるのだが

「気のせいか……？」

「たぶん」

夕焼けで赤く染まる空を見上げながら立ち上がる

暗くなる前に安静に出来る場所を確保したいからだ

「どうしたんですか？」

「寝床を確保しようと思ってな」

「まだ家は無いんですか……」

「来て二日目です持ってる方が凄いなと思うが」

額に人差し指を当て少し顔を上げる仕草をする輪廻
いつも何かを考えるとときにとっている仕草だ

意外と癖の多い妹だから見ていて飽きない

「んじゃ俺は行くぜ」

「あ、待ってください」

「どうした？」

「もし問題が無いなら私の家に来ませんか？」

くそ、上目遣いなんてせこい真似しやがって……断りたくても断れないだろ……

あまり他人の家に泊まりたくはないんだがな

「んじゃ、お言葉に甘えて」

「えへへく久しぶりに兄さんと一緒ですね」

もう輪廻を抱きしめてもいいだろうか？
こんな可愛い妹なんて早々いないだろう

本来と外れた思考をやめて輪廻の後を追わなければ

歩いて人里から少し離れた所に小屋が建っているその小屋の扉の前で輪廻は立ち止った

「あまり広くないですけど、どうぞ」

そう言つて扉を開けて招待する

外装と違つて中は女の子らしい可愛らしいものがいろいろ置いてある

「随分と自分の趣味を詰め込んだな」

「一人で暮らしているから良いじゃないですか」

まあそうなんだが……

可愛いぬいぐるみが寄りかかっている壁に描いてある魔法陣とかは

どうにかしてほしい
微妙にホラーだ

「とりあえず、お茶でも淹れようか」

「兄さんはそこら辺に座っていてください、淹れてくるんで」

妹にもてなされる兄って第三者から見たらシユールなんだろうな

座布団に座って待っていると湯呑を乗せた盆を持って輪廻がやってきた

「どうぞ」

「どうも」

湯呑には普通に緑茶が入っていた

「変な薬とか入ってないよな？」

「ご安心ください、そこまで兄さんを実験台にするほど腐ってはいません」

笑顔は良いが、前に妙な薬を入れて死にかけたのは何処の誰のせいだよ

まあ折角淹れてくれたから飲むんだが

「普通に緑茶か……」

「もう、疑い深いんですから」

「そうさせたのはお前のせいだな」

「えへへ」

可愛いがまた変な薬入っていたらただじゃおかなかったぞ

だが一度安全だとわかれれば疑う必要もない

「そう言えば何で兄さんは私を探していたんですか？」

「妹の事を心配しない兄はいないだろう」

「素直に会いたかったって言うてくれれば良いのに」

「うるさい」

久々に妹と過ごす時間は意外にも楽しい一時になった

また薬を飲まされると思っていたけどそうでもなかった……
あれは洒落にならないからな

第九話 久々の再開（後書き）

今回は妹が登場しました

キャラ設定等は後々……

投稿がだいぶ遅くなりました（いつも遅いけど）

まあ、いい訳としては風邪をこじらせてしまいました
お恥ずかしい限りです

様態は良くなりました本調子ではありませんが……
まだ喉が良くないので風邪が完治するまで少し更新は遅くなる気がします（いつも遅いけど）

では感想やアドバイス等々お待ちしております

第十話 神々の眼差し（前書き）

記念すべき第十話です

今回は原作キャラを登場させました！

でも今回はかなり短めだと思われ（字数はわかりませんw

ではお楽しみください

第十話 神々の眼差し

神々の眼差し

輪廻に一宿の恩としてケーキを作ってやってそのまま旅立った
幻想郷から一度外に出た
理由は前に住んでいた小屋を取り壊すためだ、残しておくと環境的に宜しくない

それに一つ面白そうな話も聞いたからだ

「諏訪大社か……神が治める地とは実に興味深い」

その地の人間には神が見えているのか？
とか、どんなご利益を頂いているのか？
などなど興味を持つ

諏訪と言えばミシヤグジ様とか聞いた事はあるだろう
崇りとかそういったものが専門の神だ
実力はあるが地を治めているなんて初耳だったから興味がわいた

「諏訪湖と言えばもつと南下しないと駄目か」

俺の小屋は少し北の方にある為、諏訪湖を目指すなら一度南下してから西へ向かうのが楽だ

飛んだり能力使えばすぐに着くのだがそれでは面白みがないだろう
地図を広げ自分の現在位置を確認しながら整備されている道を歩く

歩き始めて約2週間、顔見知りの妖怪の力添えもありかなり早く目的地に到着した

「中々立派な神社じゃないか」

堂々と聳え立つ鳥居、境内はしっかりと掃除されている
ご利益がある分、沢山の参拝客が確認できる

まずは軽く祈願をしてから境内を見回るか
賽銭箱に近づき五円玉を投げいれ手を合わせ軽く念じる

（どうか涼が早死にしますように）

祈願の内容なんて適当でいいのさ
別に望んでいるものなんてないんだし

早々に境内を散策し始める

「なんだかずっと監視させられている気がする」

ずっと感じる視線、すぐそばに居そうなのになぜか遠くも感じる
実に不思議な感覚だ、これがもし神の気配ならば尚更な

気配のする方向に刀の切っ先を向ける
しばしの沈黙が辺りを包みこむ

不意にその方向から少女の声が響く

「へえ、私を感じ取れるなんてちょっと驚きだね」

「馬鹿にされていたように聞こえるぞ」

「それは失敬」

木の蔭から金髪で独特な帽子を被っている少女が現れた

「なんだ、ガキか……」

「ちよつと！ガキつて何よ！」

「子供には用はないんだ」

そう子供には用はない

俺は神に会いに来たのだから

「んじゃな、暗くなる前に帰るんだぞ」

「ちよつと待てえええい！」

いきなり飛び膝蹴りをくらった

一体この幼女は何なんだよ

自己紹介を聞いてほしいのかない胸張って自慢げに宣言した

「私は洩矢諏訪子、ここの神様だ！」

「……んで？」

「驚けよ！！」

だって神力駄々漏れだし、人にしても影薄すぎるだろ
普通に話の流れからしてすぐに勘付くよね？

「もう一つお前みたいに神の気配が感じれるんだが、もう一人いるのか？」

「随分と生意気な口を利くね」

「少なくともお前よりは長生きだしお前程度に負ける気もしない、よって敬語の必要はないと判断した」

「この……人間のくせに」

「人間舐めんなよ」

実際お前たちの存在も元々人間が作ったものだしな
生半可な神になら勝てる自信はある
所詮神っていったって一つの事に対して凄いだけだし

「なんだい諏訪子、また弄られているのかい？」

「神奈子、この男が虐めるよ」

「人聞きの悪い、お前が弄ってほしいって言っていたようなものだろう」

いきなり現れた少し神々しい女性

こいつは一目で分かる、神様だ

と言うかなんで神が一つの神社に二人もいるの？

まあいいやそんな事は大した興味ないしな

「参拝しに来たのかい？」

「神に会いに来た」

「変った男だね」

「よく言われる」

こいつとならそれなりに楽しい会話ができそうだ
相手が子供だと疲れる

だが会ったからもう目的は達成したな
そろそろ帰るか

「さて、目的は達成したし帰ろう」

「おや、もう帰ってしまふのかい？」

「俺の目的は神に会うだけだからな」

「宿はあるのかい？」

「自分で何とかする予定」

「じゃあ一日どうだい？」

またこういうノリなのか……

だがただで雨風凌げるのならそれに越したことはない

一晚だけお世話になろう

「ではお言葉に甘えて」

「いきなり礼儀正しくなったね」

「首を刎ねるぞ」

「ごめんなさい」

神奈子という神のお言葉に甘えて一晚だけ宿を頂いた

神とどんなことしたかと言うと、お神酒で飲み比べをした

まあ結果は紫の時と同じく大した飲んでもいないのに倒れやがった

こんなにも早く倒れるなんて思わなかったな

一晚の恩を手料理を振る舞うことで返した

帰り際には神奈子ときつい握手を交わした
あんな感じのやつなら仲良くなれそうだ

「中々有意義な時間だった」

あまりのんびりしていると幻想郷に戻ったときに家を造る時間がなくなるな

急いで帰ろうとしたとき、後方から制止の声が響く

「なんだチビ神、早く戻っているしろしなといけないんだが」

「もう一回そう呼んだらぶちのめすよ」

「やれるのmondattaraやってみろ」

「って、喧嘩しに来たんじゃないんだった」

このチビ神一体何なんだよ

制止しておいて漫才しに来たなんて言ったらぶっ飛ばすぞ

「あんた家ないんでしょ」

「そりや移住している最中だからな」

「一つ恵んであげよつか？」

「大きなお世話だ、気持ちだけいただくよ」

「なんだい、人の親切を無駄にして」

親切って言ったって家のデザインが俺の好みじゃ無けりゃ元も子もないって

気持は嬉しくもあるがな

「んじゃこれ持って行きなよ」

「神社で売ってるお守りか、どうも」

「今回だけただでくれてやる」

こいつも素直じゃないな

可愛げはあるが……輪廻の方がかわいいな

「んじやな、気が向いたらまた来るよ」

「もう来るな」

子供みたいだ

そう言えば当初の目的とだいぶ変わってしまった気がした
どうでもいいか……

このあと幻想郷に戻る為に移動魔法を使ったが真夜中になってしま
った

「今日は野宿か……早々に家を作らなければ」

第十話 神々の眼差し（後書き）

ということで諏訪子&神奈子でした

活動報告の方に登場キャラのリクエストをして決まりました
今もリクエストは募集してます

感想の方にちらつと書いたり活動報告のコメントに書いていただければ出していききたいと思います

それでは、感想やアドバイス等々お待ちしております

番外編 作者誕生日・刃を女体化させてみた（前書き）

今日は私の誕生日なので少しハツチャけたものを書きました
先に言っておきます。

性転換・百合・カオスが苦手な人はバックしてください

書いて後悔はしていない反省もしていない！

番外編の時間軸は永夜抄完結してその次の年の春の時期です

内容は題名の通り

粗末なものですどうぞ

番外編 作者誕生日・刃を女体化させてみた

- ある日、男が女になっていたら -

俺の過去最大の汚点である

ある日のことである

いつも通り起きて花を見に散歩に行こうとしたときである

体に妙な違和感と倦怠感を感じる

不思議に思い部屋の鏡に自身を写すと

「誰だああああ！」

そこには女が写っていた

俺の叫びを聞きつけて部屋に輪廻が駆けつけてきた

そして目を丸くして驚いた表情をしながら俺に向かって

「姉……さん？」

とりあえず居間のソファーに座り気分を落ち着かせる

紅茶を飲みながら一息つくとも涼がやってきた

「刃、可愛いわ」

「殺すわよ」

って口調まで女になってる……

見た目が女性だから違和感はないけど言ってる自分が気持ち悪く感じるわ

「姉さん煽らないでください、ねえ……こほん、兄さんをやっと静めたんですから」

「こんな美女を放っておくなんて世の男は罪な存在ね」

「私は男よ……」

駄目だどうしても口調が治らない

というか女性になるならもっと大人っぽくなりたかった

どういう原理で性転換させられたのかわからないけど涼を尋問したら犯人は十中八九、涼だったわ

「で、いつになったら直るの？」

「明日、起きたら戻っているわ……」

「涼姉さん、哀れです」

「う、煩いわよ輪廻」

輪廻には尋問ではなく拷問だって怒られたが大丈夫、死んじやいな
いわ

というか死なないんだけどね

とりあえず今日一日中はこの姿ってことね
覚えてなさい涼

「ねえ、兄さん」

「何かしら？」

「姉さんって呼んでいい？」

「気が引けるけど仕方ないわねこの姿の間だけよ」

「わあい」

可愛い妹に甘いの変わらないのね……

それにしても少しずつ違和感を感じなくなってきたわ、少し危機感を持たなきゃ

あまり変な事を考えないようにしないと

「姉さん、散歩には行かないのですか？」

「そうね、ややこしいのは避けたいから今日は控えるわ」

この姿で「私は刃よ」って言ったら絶対にややこしい事になるわ明日になれば元に戻るみたいだし一日だけなら我慢してあげるわ

大分、肉体も馴染んで来たのかしら
自然と悪い気はしなくなってきたわ

「それにしても高飛車なお嬢様って感じね刃」

「五月蠅いわ涼姉のせいでこうなったんだから」

「いいじゃないですか、可愛いですよ刃姉さん」

「ちよつと言わずらそうね」

「言わずらいです」

可愛いわね、いつも兄と呼んでいた人を、いきなり姉と呼ばなきゃいけないから言わずらそうに言う可愛い妹が、果てしなく可

愛いわ

普段ならもう押し倒しているわ

「可愛いわね」

「はう！刃姉さん！胸が！」

「刃、女のままの方がいいんじゃない？」

「ぶちのめすわよ」

「ごめんなさい」

涼が部屋の隅で「私だけ扱いが違う」とかぼやいているけど、気にしないわ

輪廻は私の胸の中であたふたしているわ
相変わらず可愛いわね

今日は輪廻を愛でて過ごそうかしら

そう思った後、不意に床を見る私の影から少しばかり顔を出した羨ましそうに輪廻を見ている一人の少女

私の従順たる使い魔で良き従者の「獄条 森」（ごくじょう しん）
姿は普通に女の子でちよつとドジな所がある可愛い従者よ

「どうしたの？」

「いえ、なんでもありません」

「羨ましいんでしょう」

「全く甘えん坊ね」

ぬるりと全身を影から引き抜く森

ものすごく我慢をしているような表情で丁重に断る
こう見たら随分可愛いわね

「無理せず甘えていいのよ」

「ご主人様、お言葉ですが調子に乗って破廉恥な行動をとるのはお
止めください」

「ちよつと羽目を外しただけじゃない」

「姉さん色っぽいです」

「私よりも色っぽいなんて……」

「部屋隅と一体にしてあげるわ」

「やめて！刃！その壁は異次元には繋がってないわ！あゝれゝ」

その後、涼の行方を知る者は居なかった

そんなナレーションが入りそうな光景だったわ

大分、放っておけば復活するわ、たぶんね……

壁に人型の穴が空いてしまったわ、後で涼に直させないと

「さて、私は一寝入りしてくるわ」

「今日はもう寝過ごしますか？」

「そうするわ」

「じゃあ一緒にベッティンしたいです」

「起きたら普段に戻っているわよ」

「良いですよ」

く……花のような笑顔で一緒に寝たいなんて私のつばをドストライ
クじゃない……

全く、甘えん坊の妹には手が烧けるわ

「今日は離さないですから」

そういつて腕に抱きつく可愛い妹

駄目、もう我慢できないわ、押し倒して……駄目よ、それこそ駄目なパターンよ

ここは紳士的につて今は女ね淑女的に物事を運ぶべきよ

「おやすみなさい、姉さん」

「おやすみ、輪廻」

そうして騒々しい一日に幕を下ろした

もちろん次の日には同じような倦怠感を感じながら鏡を見ると普段の俺に戻っていた

やっぱり男の方が俺は良い

番外編 作者誕生日・刃を女体化させてみた（後書き）

こうして刃にまた新たな黒歴史が刻まれた

原作キャラは出していませんがこのあと番外編をする時の為に時間軸だけは前書きに書かせていただきました

あと一人オリキャラ出しましたが基本的に番外編でしか出ないので気にしないでください

途中からずいぶんと壊れていた気がするけどリミッターをブレイクさせたから仕方ないよね？

感想等お待ちしております

第十一話 地底の船（前書き）

今回もリクエストに答えて原作キャラが登場します

粗末なものでござ

第十一話 地底の船

地底の船

神様にお世話になってから幻想郷に戻ってきて現在は三日が経った家のない俺に同情するかのように紫が幾度となく住まいの話を持ちかけてくる

俺は気が向けば家を建てると言っているのに

そんな話をしているときに紫が面白い事を言ってきたな、確か……地底と言う場所が幻想郷の下にあつてそこは地上で忌み嫌われた妖怪たちが集っていると

そこで基本的には地上と地底は関係を断っているため立ち入らないでほしい

そんな感じの事を言っていた

つまりだ、その地底と言う場所はこの地上では見られない光景を見せてくれると思うのだ

今回は純百パーセント好奇心で行動している

そして現在地は地底へ向かっていると思われる洞窟の中だ

「暗いが光を点けるほどではないな」

不思議な感じだ、ここまで奥まで来たら普通は松明やランプなど無ければ足元なんて見えないのに、ここは違って少し目を凝らせば足元が確認できる

ちょっと不気味だがそれがまた好奇心を揺るがす

「確か地獄と言われているんだっとな」

じゃあ灼熱地獄とかあるってことかな
だけど旧地獄とか言っていたか、もしかしたらないのかな？

「まあいいさ、興味深い妖怪とかいればそれはそれで収穫になる」

俺はとりあえず楽しみが欲しい
家を建ててからこういう事をすればもつとゆっくりとできるのだから
うけど逆にこの焦る気持ちもまた楽しい

そう思考しつつ歩いていると少し開けた場所に出た

「ここは」

かなり暗い、足元は相変わらず確認できるがすぐ先は真っ暗だ
とりあえず辺り全体を確認するために炎を点ける
魔法を使えばこの程度容易いことだ

さて、周りは少し広い円状の形をした空間だ、真っ直ぐ先にさらに
穴がある

「おそらくあそこを通れば先へ進めるのだろうな」

だがその穴の広さは大人が通るには少し小さいものだった
とりあえず四つん這いになって這いずって進むとすぐに道に変化が現れた

「嘘……だろ……？」

いきなり途中から急な坂になっていて拳句に滑るとは

かなりの速度で滑り落ちて行く腰がものすごく痛い

さつきから大きい石とか凸凹した所に打ちつけられていてヤバいんだが

だが下前方から軽く光が見える、もう少しで終わるみたいだ

「って、空中に投げ出されるのかっ！」

滑った勢いのまま出口かと思ったらそのまま空中に投げ出された下を見ると家々が立っているから街なのだろう、これが旧地獄か

空中浮遊はできないが落下速度は落とさなければ、すぐに能力を發動し今の状況から最悪の未来を避けるためにいろいろ弄る
空中時の状態から地球の重力の云々等々

「よっと、無事着地」

衝撃を和らげるために片膝をついて着地をした
無事に到着したようだ

「ほう、これはこれは多種多様な妖怪が居るようで」

パツと見その数は地上とは雲泥の差だ

地上よりも遥かに妖怪の数は多い

さすがに人の気配は一つも感じられない

「少しぶらついてみますか」

着地の衝撃で痛みのある脚を引きずりながら旧地獄街をぶらつく
見た感じ居酒屋や宿と言った感じのものが多く見られる気がしない
でもない

いや気のせいだろう

歩きまわっていると何やら大きな影が上方を通って行った

「空飛ぶ船……これは何やら面白そうな予感がしてきたぞ」

俺の好奇心をそそる素晴らしい光景
船が空を飛んでいるのだ

これは見学しに行かずして帰れない

「速く行かないと見逃してしまうな」

屈んで脚に力を込める
立ち上がる勢いのまま魔力を解放して船の方へ飛ぶ

飛行はできないが水面を走る要領で空中で作った薄い氷を足場に駆け
上がったっていけば船の高さまで行けるだろう

数分ほどすると船の真後ろに到達した
そのまま爪を立てて側面を無理やり登って行く

「これはこれは中々に立派なものだ」

甲板は航海をする上で文句はない広さ、船の大きさも結構大きく立派なものだ

それにしても人の気配が感じられない

いや、此処にあるという事は乗組員は完全に人外だろう

「誰かいませんか？」

声を張ってみると扉が開き一人の少女が顔を出した

服装からこの船の乗組員だろう、手に持った柄杓がとても気になるがおそらく間違いない

「おや、こんな所に人間のお客さんとは珍しい」

「どうも、勝手に乗り込んだ事に対して謝罪と乗船の許可をいただきたくてね」

「謝罪だなんて律儀な人だね、空飛ぶ船なんて珍しいから見学しに来たんでしょう？」

「その通りだ、いろいろ気になってね」

これだけ立派な船だ是非ともこの船についていろいろ知りたいと思
った

「そう言えばまだ自己紹介をしてなかったな『雨条刃』だ」

「『村紗水蜜』だよ、気さくに『キャプテンムラサ』って呼んでね」

「ボケとして突っ込んでいいのか、マジで受け取っていいのか分
らん」

「ボケとして受け取ってくれたら嬉しい」

「じゃあそう言うことで」

さて、ここから少し俺の思考タイムと行こう

まずこの村紗という少女、明らかに妖怪ではないな
と言う事は幽霊、そして船乗りのムラサという幽霊は聞いた事はある
詳細は知らんが名前だけってやつな

そしてこの船は彼女の名前から察するに『聖蓮船』
人間と妖怪に接していた尼さんが気に行つてたとかどうとか聞いた
ことがある

確か星蓮船はそこに集つていた妖怪たちと一緒に封印されてしまっ
たんだよな

そしたらここにいる少女は封印をされて地底に来たってことが

「ささ、椅子に座ってくださいな」

「ど、どうも」

一応歓迎されているのかな、悪い気はしない

今は甲板から船内の一室に案内されたところだ

水蜜がお茶を振る舞ってくれる

「押しかけてお茶までいただいて、なんだか済まないな」

「お気になさらず、久々のお客さんだからもてなさない」と

気の良いやつで本当に良かった

水蜜と他愛ない話をしていると部屋の扉が開いた

その方向へ目を向けると黒い髪に変な羽……ってこいつは確か……

「お前……ぬえか？」

「な、なんであんたがここに!？」

「お知り合い？」

部屋に来たのは大分昔だが少しの間だけ交流を深めてた妖怪のぬえである

と言っても親密になり始めたところに討伐されて封印されたと聞いた世の中狭いものだな、友人と再会することになるとわ

「少しの間だけ交流していたんだ」

「少しの間って、人間にしたら百年単位は随分長いでしょうが」

「済まない、人間の基本的感覚を忘れてしまっているみたいだ」

だってもう妖怪なら大がついてもおかしくないくらい生きているからね

そりゃあ人間の感覚なんて忘れるよ

なんだか水蜜には変な誤解をしたらしく、あれやこれやと言葉を並べて俺とぬえの関係を話して一旦場が落ち着いた

「なんだ、ただの友人なんだ」

「その残念そうなセリフは何だ」

「だつて〜ねえ〜」

何が駄目なんだよ

内心でどんな想像したのかにツツコミを入れる俺であった

ぬえと久々の再開から様々な話を話していてその場が盛り上がってくる

「あのお」

「なんだ？」

「ついてこれません」

「ごめんなさい」

水蜜は蚊帳の外であつた

その後、水蜜からこの地底に封印された細かな理由や彼女たちが敬愛する尼さんの行方など様々な話を聞いた

「その白蓮って人はこの世界とは別の世界に封印されたようなもんか」

「封印を解くにも此処から出なきゃいけないし」

「何分、それが叶わないって言うのが現状だね」

封印だけなら俺でも解けるがさすがにいろいろと違う場所に飛ばされたら手が出せないな

ぬえは俺にその白蓮って人の解放をせがんできたが俺には実力不足だ

「刃でも駄目か……」

「悪いな、俺はそういう道は専門外なんだ」

「何も君が悪いわけじゃないから気にしないでよ」

どうやら心も広いらしい

だが、何か手が貸せることがあれば貸してやろう
友人のよしみとしてな

だが、白蓮の思想はどうも紫にそっくりだったな

「分かち合えば妖怪も人間も共存できる……か」

平和を願うのは悪くないが、理想は果てしなく遠いものだ

結果として紫は今みたいな世界を作り上げたがそれでも完全なる共存ではない

あくまでこれは一部の存在同士と一部の場所でのみである

「幻想は果てしないな……」

帰りの道に呟いた一言は虚空に消えた

第十一話 地底の船（後書き）

と、言うことで手始めに水蜜とぬえを出しました
次回も星蓮船キャラにまつわる回にしてもう少しキャラを登場させ
ようか悩んでいますw

とりあえず構成をもう少しはつきりしてから次回を書こうと思います
感想などお待ちしております

リクエストも無期限で受けているので私の粗末な文で良ければリク
エストしてくださいれば書かせていただきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7074w/>

幻想昔神紀

2011年12月5日21時52分発行